
鎖された囚人

燐火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鎖された囚人

【Nコード】

N2454V

【作者名】

燐火

【あらすじ】

そう、そして軽やかな鈴の音を聞いたのだ。

数年前、自分のサイトに掲載していたものに手を加えました。

王宮の奥深くにはそれはそれは美しい庭園がひっそりと佇んでいた。

魔法が一番栄えていた時代の産物。当時の第一級魔法師たちに造らせたであろう手の込んだそれは、まるで神の領域とも呼べるほど美しかった。

魔法の施された庭園の気温は常に春の陽気を保っていて、瑞々しい花々が咲き乱れている。甘い香りのする桃色の小川が流れ、覗き込むと極彩色の鳥が自由気ままに水中を泳いでいた。

現在の廃退しつつある魔法ではもう構築することが出来ない偽物の空には柔らかな風が吹き、雲は穏やかにたゆたっている。

そして青空に負けぬ眩い光の星々が輝いていた。

時折、空魚が羽根を震わせながら長く響く美しい声で啼く。

わたしは王族でも貴族でもないけれど、それに匹敵する権力を持つ占師の孫娘で、王宮の中を歩き回ってもある程度までは咎められることがなかった。

拾った木の棒を剣のように振り回し、元気に走る姿を大人たちは微笑ましいと見守ってくれた……と思う、たぶん。 お転婆な

小娘だと、眉を顰められていたかもしれない。

その美しい庭園はわたしが王宮を冒険しているときに偶然見つけた。薄暗い書庫の向こう。

古い王の時代に使われていた場所なのだろうか、暫く人が出入りした形跡がなかった。

かつての王が執務の間に憩う秘密の場所だったのかもしれない。

庭園の入り口は書庫の奥深く、その壁の向こうにあった。不可視の扉。

しかも扉には幾重にも魔法が掛けられていた。常人にはただの壁と見たはずだ。いや……それどころではなく、あまりに強力な魔法が更なる壁となり、人々の足を遠ざけていたのかもしれない。

わたしには祖母から受け継いだ魔法の才があった。故意に隠された扉に心が躍り、幼く恐れ多いわたしはその扉を無理矢理こじ開けたのだった。

開かれた扉の隙間から零れ落ちてくる光の、なんと美しかったとか。

さわさわと風に鳴る木々の囁きに耳を澄ませながら、幼いわたしは庭園に足を踏み入れた。

初めて見る植物に目を奪われ、何度も転んだ。手は土まみれになり、両膝からは血が滲み出ていたけれど、わたしはそれにさえ気づかず、庭園に魅せられていた。

たとえば御伽噺に出てくるお菓子の家でさえ、こつも巧妙に心を盗むことは出来ないだろう。

わたしは見えない誰かに手を引かれるように庭園を突き進んだ。
そして軽やかな鈴の音を聞いたのだ。

音に導かれたわたしの目の前に現れたのはひとりのひとだった。

桃色の泉の畔に、わたしに気づく様子なく背を向けて佇んでいる。華奢な印象を受ける身体のライン。すらりと長い脚がわたしの胸に羨望に似た感情を呼ぶ。白いシャツとゆったりとしたパンツの姿は質素で、手に携えられた演武芸に使う飾り刀だけが異様な輝きを

帯びていた。

一分の隙もない、立ち姿の美しいひとだった。

まるで、この庭園のために造られた彫刻であるかのような。

気づかれないようにそつと歩み寄り、ふと気づく。このひとは、男だ。

わたしは一度足を止め、それからまた意を決するように強く足を踏み出した。

刹那、視界に白光が煌めいた。その光には魔法の力も何もなかったのに、わたしは弾き飛ばされたように草の上に転がってしまった。尻餅をついたまま、呆然と畔の彼を見つめる。

煌めきは彼が振るった飾り刀の反射だ。ただ、光が反射しただけ。それなのに、その圧倒するような力はなに。混乱した頭で問いかける。彼はわたしに構わず演武を始めようとしていた。

まっすぐに伸びた腕先に添えられた刀がまるで彼の身体の一部のように閃いた。

ゆっくりと持ち上げられた切っ先に唐突と激しい動きが生まれ、まるで刃が生き物のように彼の身体の周りを這う。眩い光の氾濫。呼吸を忘れさせるしなやかな緩急。舞い踊る姿はまるで神事を司る巫女のようにも見えた。

けれどその切っ先に感情はない。

しゃん、しゃらん、と鈴の音が聞こえ　　違う。鈴だと思っていたものは彼の足に巻きついた蔽めしい足枷の鎖がたてる音だということに気づき、わたしはぎよつとした。そういえばあの質素な服は、囚人が着せられる衣服ではないか。

「だれ？」

王宮の奥の、ましてやこんなにも美しい場所に牢獄があるなど、聞いたことがなかった。まるでオルゴールのよう。きれいな音を奏でる小箱。箱の中にはひとりの踊り子の人形がそつと佇み、旋律に合わせてくるくると舞う。

「だれなの、おしえて」

わたしの声は届かなかった。彼の瞳にはただ刃に反射する光が揺らめき、なにも映ってはいない。

彼の端正な顔に見惚れながら、気づく。

きつと、この世界で最も美しいであろう囚人は魔法に病んでいた。

どうやっても彼の囚人の魔法を解くことはできず、とぼとぼと帰宅したわたしの頭上に落ちてきたのは深く皺の刻まれた、けれども力強い祖母の拳骨だった。ぐわんぐわんと揺れるような衝撃に、涙が滲んだ。

あの美しい庭園に足を踏み入れたこと。祖母にはお見通しだった。わたしは叱られ呆れられ、数日間、部屋を出ることを禁じられた。それだけでも辛かったが、わたしは食事を抜かれてもいいという覚悟で祖母に庭園の彼の人ことを問いかけた。

祖母は沈黙し、わたしが折れないとわかると”条件”付きで囚人の話をしてくれた。祖母の母、つまりわたしの曾祖母から聞いた話だという。

彼は数十年前の王の不興を買い、捕らえられた。元は名のある騎士で、ちょうどそのころ起こっていた他国との戦でも活躍した素晴らしい武人だったそうだ。その剣を振るう姿はまさに神速。軍神と吟遊詩人は唄った。

そのころの王は国の落ち着きだけを見れば名君だが、残虐さという点で暴君だった。王は他国の捕虜や難民をいたぶるようにして殺していったのだという。もちろん逆らった者も次々と。

彼の囚人　騎士はそれを許さなかった。正義に満ちたその剣は君主に向けられた。しかし王に刃向かったのは彼とその少しばかりの側近だけであり、大多数は恐怖から王についた。無残にも、彼以外はみんな殺された。

王は彼だけを殺さなかった。あの美しい容姿、神懸かった剣術、民衆からの支持。それらと彼の死は釣り合わなかった。かくて彼は魔法をかけられ、あの庭園へと閉じこめられた。

彼は世間には精神を病んだと伝えられ、嘆かれたが、やがてみな、彼を忘れてしまった。彼を閉じこめた、王でさえ。

もう王は死んだ。彼の罪を責めるものはない。現に庭園は忘れ去られていた。

封印を解いてもいいんじゃないかと言ったわたしに、祖母は首を振った。

これだけの長い年月、魔法に身を任せた彼の精神はもう普通ではないだろうと。壊れてしまっているのだと。もし正常だったとしても、この世界は彼の生きていた時代ではない。

だからあのままにしておくのがいいと、祖母は言った。

「もしくは……」

そう呟いて祖母は口を閉ざした。わたしはその言葉の続きを、聞かずとも理解できた。長い沈黙の末、話はそれで終わったと告げるように祖母はわたしの頭を一度撫で、身を翻した。

わたしは、祖母もいつか彼を見たのだと悟った。言葉に秘められた感情は本当にひんやりと冷たくて、哀しみと諦めに濡れていた。

祖母もわたしと同じように、美しい彼の人を救いたいと願ったことがあるのだろうか。

この話を聞くための”条件”は「庭園を忘れること」だった。

わたしは祖母の魔法によって庭園の場所を忘れた。思い出さないように封じられた。美しい庭園と囚人の姿だけを残して。わたしは毎夜、庭園を夢見て囚人と踊る。

そうしていくつもの夜が過ぎ、わたしは18歳になった。もうはしたなく城のなかを駆け回ったりしない。祖母のあとを継ぐべく占師になるための修行に励んでいる。

けれど、わたしに未来視の力は備わっていないかった。

魔力は祖母よりも強大になっていた。

その年、王が崩御した。まだ若い王だった。

あとを継いだのはわたしと同じ年の気弱な第一王子だった。

彼とは権力を手に入れると豹変した。

心優しかつた彼は忽然と消えた。

快楽を求め、酒に溺れ、女を掻き集め、湯水のように国庫を空けた。自らの欲望の妨げとなるものはみな、殺していった。

祖母も殺された。占の結果が気に入らなかつたと。

お前はもうすぐ死ぬのだという、呪詛のような言葉が。

わたしは急遽祖母のあとを継ぎ、未来の視えない占師として城に上がることになった。

就任の挨拶のとき、王座の前に跪いたわたしを舐めるように見下ろし、王はその身分の高貴さの欠片も伺えない卑下た笑みを浮かべ、べたべたとした猫なで声で言葉を吐いた。

かつての清廉な王子の面影はなかつた。

神聖な占師であるはずのわたしは何故か王の寝室に呼ばれ、物のようにベッドに転がされる。覆い被さってくる身体。肌を滑る触手のような手。耳たぶをねぶるおぞましい舌。太股に押しつけられた硬さに、嫌悪感が沸騰する。

「……おばあさまの最後の言葉を忘れたか？」

びたり、と男の動きが止まった。恐る恐る伺うように見上げてくる二つの目。

わたしの大切な、大好きな祖母を殺したことをこの男は忘れていたのだろうか？

やっと浮かび上がった怯えの表情。言い訳を紡ぐのか、口がもごもごと動く。

「おまえはもうすぐ死ぬ」

祖母の声で言っちゃった。

「わたしは殺すんだ」

無防備な首筋の血脈をめぐり、手刀を振り下ろす。魔力によって何倍にもなったわたしの腕力。首はまさに皮一枚残してぶらんと揺れた。

雨のように降る血は魔法で簡単に避けることができたけれど、そうしなかった。

頭に、髪に、顔に。べっとりついた血が不快だった。

だからたぶんわたしはもう、こういう殺し方はしないだろう。次はもっと美しく殺す。

わたしは、あの庭園の入り口の前に立っている。

祖母が死んだとき、わたしにかけられた記憶を封印する魔法は消えた。優秀な占師だった祖母にはこの結末が見えていたのかも。だから彼を救うために、わたしの記憶を消去するのではなく、封印するに留めた。

城が騒然としている。

犯人がわかつているのに誰もわたしを捕まえに来ない。血まみれで徘徊する娘は怖い？

わたしは鎖された庭園の扉を破った。あの幼いころのように、もう一度。

硝子の碎けるような音が聞こえ、庭園への扉は粉々に散った。祖母譲りのわたしの魔力は未来視ではなく、破壊の力へと伸びていた。幼いころはこじ開けることしか出来なかった不可視の扉。今度はもう、閉ざせぬほどに碎け散った。

春の光、咲き乱れる花々、甘い芳香、透き通った桃色の小川、極彩色の鳥、涙が零れるほど美しい空、優しく頬を撫でる風、煌めく星、唄のような空魚の声。

そして聞こえる、軽やかな鈴のような、美しい彼の人の音を戒める鎖の鳴る音。

彼はきつと血まみれの女を見てもその表情を一切変えずにただ踊り続けるだろう。

それが彼の罪、彼の罰。
では、わたしは？

これから、彼の魔法を破壊する。戒めの呪縛から解き放つ。彼は壊れているだろうか、狂っているだろうか。

それとも長すぎた罰に耐えられず、殺してくれと願うだろうか。そのとき、わたしは彼を殺す。

彼の美しさを損なわず、苦しまずに死ねるように、優しく。

さあ、どれだろう。どの未来だろう。わたしには未来が視えない。わたしは彼を殺すのか。それとも救えるのか。
今度は美しい庭園でわたしが踊る番なのだろうか。

静かに、庭園へと足を踏み入れる。
。

(後書き)

数年ぶりに小説を書くことと思い立ちました。
とりあえず指が動かないので、リハビリ気分で昔の小説を発掘しま
した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2454v/>

鎖された囚人

2011年7月27日03時10分発行